

「想い出がいっぱい」

卓上のスマホがブーンと震えた。「また母さんだ」とつぶやいて、小さく舌打ちをする。「あ、母から。ちよつと電話してくる」

シュウイチが足早に店を出る。朝から五回目の電話だった。ため息をつきながら、スマホの着信履歴にズラリと並ぶ母親の名前を押した。

「うん…。さっきも言ったけど、晩ごはんは大丈夫。食べて帰る。お風呂も自分のいいタイミングで入るよ」

頭上を山手線と京浜東北線が同時に通過する。母の返事はよく聞こえなかったが、「ハイハイ、またあとでね」と言っただけで電話を切り上げた。

やれやれ。このやり取りも何回めだ…。まだ電車の音が鳴り響いている。シュウイチは一人ごちた。

二〇二三年一二月の土曜日。東京、最後の日。有楽町駅からほど近い「せんべろ」と呼ばれる高架下の居酒屋で、昼間から飲んでた。

「いや、まいっちゃうね。二時間前も、ごはんはいらないうって言ったのに。しかも、今ので今日、五回目の電話だよ？ さすがに笑っちゃうよ」

席に戻って飲み仲間のニシカワくんに報告する。無理やり笑顔を作ったからか、頬がひきつっているのが自分でもわかった。

「ウチも似たようなもんっすよ。電話すると全然かみ合わない。姉貴が近くに住んでるからいいけど、ちよつと心配になりますもん」

シュウイチよりひと回り年下の彼がそう言っただけで笑って言った。今日で田舎に引っ込んで母親と暮らす中年おやじの不安を察したのだろうか。つとめて明るく振る舞っているようにも見える。

「親からすれば、いくつになっても子どもですからね。…ま、俺、子どもいないからわかんないっすけど。アハハハハ！」

真面目なんだか適当なんだかわからない。そこが彼のいいところだ。「コレ行ってきます」と、右手の人差し指と中指で煙草を意味するVサインを作りながらニシカワくんが喫煙所に向かった。

ふと見ると、腕時計の針が一八時を指していた。シュウイチは予定より一本早い新幹線に乗ることにする。保守的で世間体ばかり気にする母のことは苦手だったが、何だかんだで気がかりだった。朝の電話で「最近は九時過ぎには寝る」と言っていたから、二一時間前には家に着きたい。

「そろそろ行くね」

まだ「行く」と言ったことに、東京生活の長さを感じるなど思った。今日からは「帰る」だ。東京駅一九時〇四分発の「はくたか」に乗ることにしてニシカワくんにも別れを告げた。

「はくたか」が大宮を出発した辺りから、急に建物が低くなる。熊谷に着くころには田畑が目立ち始める。遠くに連なる山々を見て、故郷に帰るんだな…と実感が湧いてくる。軽井沢を過ぎると、暗がりの中に浅間山の輪郭が薄っすらと見えてきた。あれ、あんなに小さかったっけ？

考えたら、上京後に帰省したのは数えるほどしかない。記憶が曖昧なものも無理はないか。「まるで観光客だな」シュウイチが声にする。

一九九七年に高崎―長野間で新幹線が開通する前は、上野駅から特急「あさま」か「白山」に乗って三時間ほど掛かっていた。二〇代、三〇代は仕事が忙しかったこともあって、故郷から自然と足が遠のいた。両親との折り合いもいいとは言えなかった。実家に泊まるのが苦痛だった。帰省するのは五年ぶり。父が亡くなって以来のことだ。今回は長い帰省になると思うが…。記憶を辿りながら、東京駅で買ったコーヒーを飲み干す。

車窓に映る風景を眺めながら、シュウイチは昔を思い出していた。

シュウイチが生まれ育ったのは、真田氏ゆかりの地として有名な長野県の上田市。教育熱心な両親のもと習い事に精を出し、小学生までは優秀な生徒で通っていた。中学生になると少し成績は落ちたが、部活のサッカーに打ち込んだ。自分で言うのも何だが、モチなくもなかった。

風向きが変わったのは、卒業を迎える頃。第一志望の高校に落ちてからだ。

長野は全国的に知られる教育県。幕末期に日本一の数の寺子屋を構え、明治時代には県内のあちこちに旧制中学校が開校。元号が令和となった現代でも博物館や美術館の数が全国一位、図書館も日本屈指の数を誇っている。

父親は役所に勤務し、母親は看護師。両親ともシュウイチが第一志望としていた進学校の卒業生だった。昭和一桁生まれの父は一言「情けない」。母は「明日どんな顔をして出勤すればいいの」と言った。今の親であればもう少しオブラートに包むか、前向きな言葉をかけるのだろうか、昭和の時代はそんなものだった。

同じ高校を受験した友達には「熱が出てたからね」などと、受験直前に風邪をひいたことを言い訳にしたが、偏差値的には合格ギリギリのライン。たとえ合格したとしても、高校での成績は下から数えた方が早かったはずだ。

入学してからの一年は暗黒だった。これまで勉強もスポーツもそこそこできていたこともあってプライドが邪魔をした。「俺はお前らとは違う」と自ら壁を作った。部活にも入らず、友達らしい友達はできなかった。翌年、一つ年下の弟が両親の通った高校に合格してからは、家でも居場所を失った。

唯一の楽しみは深夜ラジオだった。今で言う「はがき職人」として、毎週せつせと投稿していた。フォークシンガー二人がひたすらバカ話をする番組で、一度だけネタを採用されたこともある。こんなに熱中したのは初めてのことだった。

ベッドに寝たまま電気が消せるよう延長した照明の紐をカチャッと引つ張る。小遣いを貯めて買った赤いポータブルラジオセにイヤホンを差す。音響メーカーのものではない、家電メーカーの製品だった。ヘッドホンを買うほど小遣いに余裕がなかったから、父の机の引き出しにあったベージュ色をしたモノラルイヤホンを拝借した。

頭まですっぽりと布団をかぶって、灯りが漏れないように注意を払う。まるで戦時中だなとシュウイチは思う。たまに、父が自分の部屋の前にあるトイレに入るから油断はできない。やる気の出ない高校生活。成績も芳しくない。夜な夜なラジオを聴いていることが知れたら、ラジカセは即没収されるだろう。

ネタが採用されたフォークシンガー二人の番組が終わると、次はこれだ。お目当ての番組のスタートを待つ、この時間が至福の時だった。

さあ、深夜一時。時報とともに、軽快なサンバがオープニングで流れ始める。体育会系出身のお笑いタレント、毒舌の漫才師。パーソナリティのトークに、声を殺して静かに笑う。今でも口元を抑えて「クククク」と笑うため、行きつけの居酒屋では「キモい」だの何だのとイジられるが、この当染みついた習性なんだと思う。ニシカワくんともその居酒屋で知り合った。早いもので二〇年来の付き合いになる。

高校二年になってしばらく経った頃、クラスの女子から呼び止められた。入学以来、初めてのことだった。シュウイチは下駄箱の前で室内履きのサンダルから踵に星のマークが入ったバスケットシューズに履き替えていた。

確か：名前はヒノミヤアオイとか言った。ポニーテールが風にゆれている。彼女もまた教室で、一人でいることが多かった。凜としていて、どこか近づき難い雰囲気があった。

「ちよつといい？ 昨日のリクエストカード、君だよね？」

急に話しかけられたこともあるが、何より「カード」という言葉に驚いた。なぜ、あのはがきを書いたのが自分だとわかったのだろうか？

「えっ、ど、どうして？」

「だって下敷きに写真を入れてたし」

シュウイチは、その当時流行った透明のクリアファイルのような下敷きに雑誌の切り抜きを入れていた。一枚はラジオで知ったイギリスのロックバンドだ。もう一枚はラジオ番組のDJをやっているミュージシャン。DJの彼は、リクエストはがきのことを「カード」と呼んでいた。彼女の席は、教室の窓際の席に座る自分の斜め後ろ。何かの拍子に下敷きが見えたとはいえない。

「そ、そうだけど…」女子と話すのは一年ぶりだ…。緊張で言葉が続かない。

「だよね。あと、あのラジオネーム…。外を眺めていつも一人で音楽を聴いてるし、昨日『長野の朝晩はまだ肌寒いです。このホットなナンバーをお願いします』って読まれてたし。それでピンときた」

はがきの文面を復唱されて恥ずかしかったが、それ以上にうれしくもあった。

一九八〇年代の中盤。ラジオの情報誌が隆盛を誇っていた。エアチェックする番組に蛍光ペンで印をつける作業もシュウイチは楽しみだった。録音しては、鮮やかな色彩のイラストが描かれた付録のカセットレールに、レタリングシートで日付と番組名を入れた。同じイラストレーターが描いたポスターも壁に貼った。その絵を真似てプラスチック製のブラインドも取り付けた。スチール製は高くて手が出なかったのだ。畳敷きの六畳間が急におしゃれになった：ような気がした。

深夜番組のほかに、音楽番組にも夢中になった。とりわけ、月曜日から金曜日の帯。二三時から始まるFMの番組は、録音して繰り返し聴いた。ヒノミヤが言うように教室でも聴いていた。一番のお目当ては月曜のDJ。ミュージシャンの彼が歌う曲の歌詞からは都会を感じた。たぶん、この頃からだ。シュウイチが「将来は東京に行きたい」と強く思うようになったのは。

そんなある日、番組で流れたイギリスのロックバンドの曲に衝撃を受けた。無骨なアメリカのバンドにはない繊細なギターサウンド。イントロのリフにシビれた。DJの彼が「うーん、このかわいい人って感じかな」と意識した曲名とバンド名をすぐにメモした。

翌日には駅前にある本屋で海外ロックの専門誌を買った。LP盤：今で言うCDのアルバムも雑誌に載っている東京のレコード店の通販で何とか手に入れた。他のイギリスのバンドも好きになった。

もれなく、この音楽番組にも投稿するようになった。毎月のように「カード」を送った。

「リクエストは、長野県、〃窓際で一人〃から。ちょっとメランコリックだけれど、いいネーミングだね」昨日の晩、大好きなDJからはがきを読み上げられてシュウイチは有頂天になった。例の、イギリスのバンドの曲をリクエストした。

「私も大好きなんだ、あの曲」ヒノミヤが言う。

「ね、いいよね！」靴紐を結び終え立ち上がったシュウイチが前のめりになる。

よく見れば「ぶりっ子」と言われた女性アイドルと人気を二分する「不良少女」によく似ている。ポニーテールがよく似合う。クラスでは目立つ存在ではないが、大人びた美人だと思った。

上田駅まで一緒に帰ることにする。初めて言葉を交わしたその日、彼女は真っ赤なトレーナーを着ていたことを、シュウイチは今でも覚えている。

長野のほとんどの高校には制服がない。地元の高校を出た、今の自分と同じ年くらいの中学の担任から「一九六〇年代後半の学生運動がきっかけで、制服の自由化が始まった」と聞かされたことがある。

そういえば、ヒノミヤは赤い服ばかり着ていた。後日彼女に聞くと「赤が好きだから。それ以外に理由はない」と答えた。彼女の答えはいつも簡潔だった。

一方のシュウイチは煮え切らない性格で、黒ぶちの眼鏡をかけていた。「牛乳瓶の底」と

例えられたぶ厚いレンズの眼鏡だった。眼鏡をからかう陰口も聞こえてきたが、大好きなバンドのボーカルも、そのバンドを紹介してくれたDJも大きな眼鏡をかけていたからまんざらでもなかった。「君らにはこのよさがわかるまい」などと心の中で思っていた。

ファッションのお手本もその二人だった。ボタンダウンのシャツや千鳥格子のジャケット。似たような服を商店街で探したものだ。賑わった海野町商店街は、今頃どうなっているだろう……。帰ったら、ちよつと行つてみたい気がする。

高校生活が急に明るいものになった。あの番組のリスナーで、なおかつシュウイチが好きなバンドの大ファン。それもかなりの音楽通。しかも、女子が！ 今のご時世にそんな言い方をしたら叱られそうだが。

当時音楽を聴いている女子のほとんどがアイドルの曲か、バンドを知っていたとしても、テレビのベストテン番組に出ているグループくらいのもだった。男子でもパンクやヘヴィメタル好きが多かった。ヒノミヤは自分好みの音楽について一緒に話せる貴重な存在だった。

出会った翌日からは、教室でたまに会話をした。行き帰りの電車ではわざと席を空けて座った。変な噂を立てられると彼女が迷惑すると思つたからだ。その代わり、ダビングしたテープを、そつと教室で渡すことはあつた。そのうち彼女も自分でセレクトしたテープをくれた。レーベルに記された曲名を見ると、音楽の趣味は幅広かつた。

聞けば、ヒノミヤは週に何度か喫茶店でアルバイトをしていて、店内で流れるラジオから音楽に興味を持つたそうだ。洋楽が好きでマスターの影響もあるらしい。

バイトをしているだけに、コーヒーにも詳しくかつた。家でインスタントしか飲んだことがないシュウイチに正直味の違いはわからなかつたが、足しげく店に通ううち、うまいかそうじゃないかは判断できるようになつてきた。

それからは喫茶店巡りも趣味に加わつた。ヒノミヤがバイトする店で落ち合う。てきぱきと働く姿を見るのが好きだつた。常連のおじさんを小粋な会話で盛り上げる様子も堂に入つていた。大人びた容姿も相まって、傍から見れば女子大生に映つただろう。

バイトが終わると別な喫茶店に移動することもあつた。どこも古きよき昭和の時代の雰囲気心地いい店ばかりだつた。実際に時代はまだ昭和だつたから、当たり前といえげたり前だ。東京に出て気づいたが、上田はそうした喫茶店が昔から多かつた。

しばらくすると、ヒノミヤとは映画も見ることがなつた。当時の上田に映画館は五館ほどあつた。中でも花やしき通りにある「上田映画劇場」にはよく行つた。上田を舞台にしたアニメ映画に登場した時は、故郷のことを忘れて久しかつたシュウイチも懐かしく感じたものだ。

映画の趣味も合つた。マフィアの栄枯盛衰を描いた映画で知られる監督の作品が好きだつた。二人のフェバリットは、その監督が撮つた青春映画の金字塔。中学時代に公開され、

アニメ以外の映画で初めて感動した。シュウイチ自身、五十何年間かの人生で何度見たかわからない。ビデオデッキすら普及していなかった時代。映画館は、信濃の中都市から別世界へといざなってくれた。

帰りには決まって千曲川橋梁が見える堤防へと向かった。土手に腰掛けると、辺りが暗くなるまで音楽や映画の話をするのが楽しい時間だった。新しく買ったステレオイヤホンや片方ずつ耳に当てて、カセットテープを聴いた。

三年に進級した後もヒノミヤとの仲は続いた。二人が好きな上田城跡公園を毎週のように散歩した。夏には「七夕まつり」や「上田わっしょい」にも出かけた。とはいえ、手すら握っていないし、そもそも付き合ってもいない。呼び名も、お互いの苗字。でもシュウイチは、今のままで十分だと思っていた。

二〇時半に「はくたか」が上田駅に到着する。吐いた息が白い。改札を出て、上田電鉄別所線に乗り換えなければならない。下りの下之郷・別所温泉行きは、二〇時三六分発だ。夕方の帰宅時間帯で一時間に二本。これに乗ることができれば、時間をつぶさなくていい。上田では東京のように、五分おきに電車は来ない。改めて東京って便利な街だったんだな。車を買うまでのしばらくの間は、常に電車の時間を計算して動かなければいけないな…と思う。

シュウイチの実家は、上田駅から四つめに当たる上田原駅にあった。直線で三キロメートル。車で七分、徒歩で四〇分ほど。シュウイチが東京で暮らしていた世田谷区の三軒茶屋駅から渋谷駅と、ちょうど同じくらいの距離になる。

五〇代になった今も渋谷で飲んで歩いて帰ることがたまにあった。耳元のイヤホンはワイヤレスに変わったが、渋谷から国道246号線を歩きながら聴く大好きな八〇年代く九〇年代の音楽は、酔った足取りを軽やかにしてくれた。すれ違う車のヘッドライトも気分を盛り上げる。それも退屈しない都会の街並みがあつてこそなんだよな…と、東京の生活をすでに懐かしむ自分がいる。

渋谷から三軒茶屋方面に向かう246号線を、ずっと東京で暮らす人たちのように「ニヨンロク」、三軒茶屋を「サンチャ」と呼び始めたのは、いつ頃のことだったろうか…。

上田に帰ることを決めたのは、半年ほど前のことだった。

実家の近くで暮らす弟から「九月の転勤で東京に行くことになった」と電話があつた。

系列会社への出向になるが、どうやら栄転のようだ。東京には大学に進学した甥っ子がいる。夫婦と息子の三人で暮らすという。

シュウイチは今から三年前、大学を出て三〇年間ほど勤めた出版社を早期退職。その退職金をもとに、ずっとやりたった陶器店を開こうとしたものの、コロナ禍によって実店舗の開店が難しくなり、ネットショップで販売を行っていた。陶器が好きになったのは、高校時代の喫茶店巡りの影響もあつた。ヒノミヤがバイトする喫茶店のマスターが出す器は

どれも味わい深いものだった。

母は高齢で最近では調子が悪いらしい。長野の大学を出て、地元本社を置く精密機器メーカーに就職して以来ずっとそばで母を気にかけてきたのは弟だ。父の葬儀の際も、次男の彼が何から何まで切り盛りしてくれた。今度は自分の番だとシュウイチは決断した。三〇歳で結婚して三年ほどでバツイチになってからはずっと独身で、身軽だったこともある。

「ネットショップはどこにいたって続けられるし、幸い僕はパートナーもないからね、ハハハ」

ひと月前、家を引き払って上田に引っ込むことを伝えると、ニシカワくんが飲み仲間を集めて送別会を催してくれた。

「これが都落ちって言うんっスね〜」などとイジられたが、帰郷する当日も新幹線が発するまでシュウイチの話に付き合ってくれた。その気持ちがありがたかった。

彼とは年齢こそ離れていたが、妙に馬が合った。出会って何年かした頃には、知り合うきっかけになった近所の居酒屋以外でも遊ぶようになった。

ほかの常連客とも仲よくなった。ここでは仕事の話をする人はいない。仕事の話をしないうから知らない上司のグチも聞かなくていい。そもそも誰がどんな仕事をしているのか、何となくしかわからない。説教も昔話も自慢話もない。東京らしい適度な距離感が心地よかった。衛星放送の旅番組で知ったシュウイチお気に入りの居酒屋評論家「居酒屋の『居』は居心地の『居』」と言っていたがまさにその通りだと思う。

自分が四〇歳を過ぎた頃には、公共放送でやっている朝の連続ドラマの話題から、それまでニシカワくんとは語ることがなかった、お互いの家族の話もする仲になっていた。

ここ数週間の引っ越しの疲れもあって、結局は上田駅からタクシーに乗ることにした。リュックを膝に抱えながら眺める窓の外は暗い。

出迎えてくれた母の一言めは「ご飯は？ お風呂が冷めるから入りなさい」だった。夕方の電話ではいら立っていたシュウイチも、その声を直接聞くと気持ちがあほくれた。久しぶりに会う母は思いのほか老けていたが、高校生のあの頃に戻ったような気がする。

風呂から上がる。東京ではシャワーばかりだったから湯船が気持ちよかった。洗面台横の洗濯機の上には、父が着ていた古いタオル地のパジャマが用意されていた。ズボンの裾が少し短かった。

長い一人暮らしの生活では味わえなかった温かな心遣いに感謝しながら、パリッと糊のきいた布団にくるまる。十八歳まで毎日のように見えていたはずの天井に慣れない。まだ二三時少し前。東京の行きつけの居酒屋は、深夜一時過ぎまで営業していた。普段寝るのは二時くらいだった。

ネットショップは続けるとして、世間とのかかわりは持たないな。何かアルバイトでもやるか。五〇歳を過ぎて、どんな仕事があるだろう？ 仕事もそうだけど、ニシカワくん

たちと知り合ったような飲み屋さんは見つかるだろうか？　そこで話が合う人はいるだろうか：シユウイチはこれからの生活のことをぼんやりと考えた。

疲れは感じるが、目がさえて眠れない。天井の木目のしわを数えながらふと思いついて、スマホに入れたラジオのアプリを立ち上げた。懐かしいサンバのリズムが流れてきた。

それと同時に「前途を祝して」行きつけだった店の大将からはなむけの言葉と泡が溢れそうなビールジョッキの写真がスマホに送られてきた。ジョッキの向こうには、いつもの面々がぼんやりと写っていた。

翌朝の一〇時頃、シユウイチは家を出た。八時半に目が覚めると、炊き立てのご飯に熱々の味噌汁、焼き魚、卵焼きというニッポンの朝ごはんが用意されていた。味噌はもちろん信州味噌だ。改めて、上田に帰ってきたことを実感する。母の状態はすこぶるよかった。ニシカワくんが言っていたように、世話の焼ける息子が帰ってきたから少し元気になったのかもしれない。

最寄りの駅となる上田原駅。久しぶりに立つホームは小さかった。少し世田谷線沿いの駅に似ているなど思った。世田谷線は三軒茶屋を起点とする、こじんまりとした路面電車だ。慣れれば案外、ここも東京も変わらないかもしれない：などと無理やり不安をかき消しながら一〇時三〇分発の電車を待つ。昨晩はタクシーで帰宅したため、別所線に乗ってみたかった。

二両編成の電車が駅を出発してからほどなく、運転席の窓の先に赤い鉄橋が見えてくる。上田駅へ到着すると「温泉口」を出て、目の前の道を真っすぐ歩いた。堤防の向こうに千曲川が見える。途端、昔ヒノミヤと一緒に巡った喫茶店をはじめ、彼女との思い出があふれ出す。二人とも若かったから、とにかくよく食べてたな…。

百貨店「ほていや」の食堂で食べた天かすと青のりの焼きそば、「上田SEIBU」で土曜日の午後二時から百円になるラーメン。ラーメンといえば、原町「ユニー」の「スガキヤラーメン」もうまかった。いわゆる本物とはちよつと違う形で提供されていた「イトーヨーカドー」のお好み焼きにも、ずいぶんお世話になったものだ。今はどこもなくなったと聞くが、すべてが懐かしい。

あの時、彼女が着ていたトレーナーと同じ色をした鉄橋を右手に眺めながら、シユウイチは思う。四〇年前は、どの辺りに腰掛けてたっけ？　どんな話をしたのかな。あの時あやまっておけばよかった…。

ほとんどのクラスメイトは、大学受験に向けて大詰めを迎えていた。担任も「そろそろ本気で目の色を変えて…」などと言っていた。

ヒノミヤとの間に微妙な亀裂が入ったのは、そんな高校三年の師走のことだった。クラス中がソワソワと浮足立つ中、どこからか彼女の噂話が聞こえてきたのだ。

「聞いた？　どうやら一つ年上らしいよ」――。進路希望調査票に書かれたヒノミヤの

生年月日を盗み見た誰かが、噂の発信源のようだった。そういえば、高校に上がるまでは学区外で暮らしていたという彼女の中学時代を知る者は、ほとんどいなかった。

「留年した」はまだましな方で、前に通っていた高校を素行不良で退学になった。教師と恋仲になって長期停学に：など、年上である理由はどれも聞くに堪えないものだった。ヒノミヤは率先してクラスの女子たちと交わろうとはしていなかったし、興味もなさそうだったから言われるがままでいた。

シュウイチは頭にきたが、ウワサを否定することができずにいた。ヒノミヤに直接聞くこともしなかった。お調子者の女子に「仲いいんだから聞いてみてよ」とはやし立てられても、無視するのが精一杯だった。要は勇気がなかったのだ。だって別に付き合っているわけじゃないし：と自分をごまかした。

「だって風邪ひいて熱が出たし」そう言って、高校受験の失敗を言い訳していた中学三年の頃と同じだった。

やがて冬休みに入った。通りかかった彼女のバイト先を窓越しに覗くと、変わらずそこにいたし、店に入れば話せたことだろう。でも、シュウイチは行動しなかった。冬休みが終わっても、話しかけることはおろか、目が合うと顔を伏せるありさまだった。教室では受験勉強に必死なフリをして、ヒノミヤのことを気にしないよう努めた。

一度だけ、ヒノミヤから話しかけられたことがある。初めて話をした下駄箱の前だった。

「しばらく私のこと避けてない？」

「いや：そんなことは」それ以上は何も言えなかった。

「あ、そ。もしかしてウワサのこと、気にしてる？」

「なんか、一っ年上だって：みんな言ってる、よね？」口元がこわばって、なかなかうまくしゃべれない。

「事実だよ」

「えっ、そ、そうなんだ。何で言ってくれなかったの？」

今度は彼女を問いただすような強い口調になって、シュウイチは自分でも驚いた。

「聞かれてないし。そもそも私は何とも思っていないし。なんでみんな気にするのかな、そんなどうでもいいことを」そっけなく彼女は言った。相変わらず簡潔な答えだった。

「ヒノミヤさん：」あ、しまった。年上であることを気にするあまり、思わず「さん」付けで呼んでしまった。いつもは「ヒノミヤ」呼びなのに。

彼女は少し寂しそうな顔をした。言葉を交わしたのはそれが最後になってしまった。

帰郷してしばらく。シュウイチは働き先を探しがてら、かつてヒノミヤがバイトしていた喫茶店を訪ねた。そこにはもう建物はなかった。周囲には空き地が目立つ。彼女と通ったいくつかの喫茶店も店を畳んでいた。四〇年経っても元気に営業を続けている何軒かで休憩をする。ヒノミヤが紹介してくれた店のコーヒーは今もうまかった。

駅前のメイン通り。交差点の角にある「甲州屋」：ここはどちらかと言えばフルーツパ

ラーのイメージが強かったけれど、今も店内の様子は変わらなかった。

ほかにも「亜羅珈琲」、「珈苑アド」、「コロナ喫茶店」、「綿良」、「珈琲木の実」…今もたくさん喫茶店があることは、これから暮らしていく上でうれしいことだと思った。当時はちよつと敷居が高かった店も、今の年齢にはどこもちよつどいい。

その足で向かった懐かしの「上田映画劇場」は「上田映劇」と名前を変えてリニューアルしていた。映画のロケ地として使用された際、四〇年前の浅草をイメージして外観を変えたそうだ。

洋服を探した海野町商店街。そこから少し裏に入った飲食店街もまだまだ元気だ。マンションなど新しい建物も増えたが、「甲州屋」が入る商業ビルなど古い建物もたくさん残っている。あちこちで見かける丸いポストもこの街にはよく似合う。昔は、そんなことを思いもしなかった。

ラジオ情報誌や音楽専門誌を買いに行った本屋もまだそこにあった。さすがは教育県、全国的に書店の数が減っている今もしっかりと地元を根を張っている。そういえば、カフェも兼ねたブックストアだったり、新しい形式の本屋も増えた。

もう少し歩くと、江戸時代の景観を残す柳町界限には造り酒屋や雑貨店、蕎麦屋などが軒を連ねている。一〇年ほど前に公共放送の時代劇で一躍名をはせた上田城。ドラマのオープニングに映し出された石垣を見上げるのも久しぶりだ。ヒノミヤと座った城跡公園のベンチもまだあった。

年を重ねたからこそ見えるものもあるんだと思う。改めて駅界限を歩いてみると、なかなか味わいのあるいい街じゃないか。

最近「SNS映えする」と若い観光客が県外からも大勢訪れているらしい。観光協会も「ニュー・ウエダ」としてPRしていることを知った。響きがマンチェスター出身のロックバンドみたいだなと思って、変にニヤニヤしてしまったが。

帰りには、再び千曲川の土手に寄った。赤い鉄橋を眺めているうちに、成人式の出来事を思い出す。洪々と参加した式を終えて、同級生たちが旧交を温めていた時のことだ。聞くともなく、こんな話が耳に入ってきた。

ヒノミヤは、実は中学の頃に病気をして一年遅れで高校に入学したこと。わけあっておばあさんと二人暮らしをしていたため、アルバイトをして家計を助けていたこと。卒業後は県内の専門学校に進学したこと。もちろん、一つ年上であるから、彼女は成人式にはいなかった。

東京の居酒屋ではひと回りも年下の友達にイジられても平気なのに、どうしてあの時はたった一年の違いに狼狽したのか…。ヒノミヤが言った「そんなのどうでもいい」という気持ちは今がよくわかる。女性の方が心身ともに成長が早いと言われるが、五〇歳もすぎてもようやく追いついたのか…自分は本当に情けないヤツだ。川の向こう側に沈む夕陽を見ながら、もし叶うなら、ひと言「あの時はごめん」とあやまりたいと願った。

その日、帰宅して部屋を片づけていると一枚のEP盤が出てきた。いわゆるシングルレコードというやつだ。上田市出身のフォークデュオが歌ってヒットしたテレビアニメの主題歌だった。高校時代にヒノミヤがくれた。もらった時は、あの洋楽好きの彼女が珍しいなと思ったが、「二枚買ったんだ。応援したくて」と彼女は言った。

「東京の大学に行く」とシュウイチが告げると「私は将来もここで働きたい」と答えたヒノミヤの真剣な顔を思い出す。彼女は上田の街が好きだった。

スマホで検索すると、この曲は一九八三年のリリース。そういえば「歌詞を聴いて励まされた」とも言っていたな。もしかして、病気で療養している最中に聴いていたのかもしれない。今頃どこ何をしているのだろうか？ 歌詞にある通り、大人になったヒノミヤも少女だったことを懐かしく思い出していたりするだろうか。そう思うと、シュウイチはわけもなく泣けてきた。

クリスマスも目前。帰郷して以来、比較的元気だった母の状態が、この頃は思わしくなかった。東京にいる弟とも相談して、検査のため入院させることが決まった。自宅からほど近い、生島足島神社のそばにある総合病院へ車で向かう。先日、ようやく中古車を買った。病院の駐車場に頭から車を入れる。交通機関の発達した東京では運転する必要があるなかった。バックで入れる練習もしなきゃなと思う。

夏至の朝日や冬至の夕日が照らす光線に沿って、遺跡や神社仏閣が並ぶ――。最近はいラインと呼ばれる直線上にその病院もある。ここ上田では、信濃国分寺、生島足島神社、泥宮、女神岳を結んだ線がそれに当たるとのことだった。

カレンダーによると、今日一二月二日はちょうど冬至にあたる。天気はイマイチだけど、なんだか縁起がよさそうだなとシュウイチは思った。母の検査結果もよければいいが…。

待合室で母の名前が呼ばれる。ベテランの看護師さんが母の手を取って案内してくれた。ときばきと仕事をこなす彼女は、時々冗談か何かを言って、ふさぎ込んでいた母を笑わせてくれた。少し元気が出たのか、母も「あら、ウチの息子も独身なのよ」などと、余計なことを言っている。

そうこうするうちに、そばにいた若い看護師さんが「お疲れさまでした、師長」とベテランの看護師さんに声をかけた。どうやらこの時間で夜勤が明けらしい。そっか、母もがんばっていたんだなと感謝の念が湧いてくる。

検査には時間がかかるそうだから、車の中で待つことにする。空には厚い曇りが広がっている。先ほど自販機で買ったコーヒースプーンをすすり、少しだけ窓を開ける。その瞬間だった。カッティングギターの心地いい響き…懐かしいあの曲のイントロが聞こえてきた。

音のする方向に目をやると、目の前の通用口から出てきた先ほどの看護師長が、手にし

たスマホをポケットにしまうところだった。ギターの音色は着信音が何かだろう。

隣に駐められた赤い車に、ツカツカと近いてくる。風にゆれるポニーテール。一瞬で記憶がよみがえる。気がつくと、シュウイチは車のドアを開けていた。

「いい曲ですよね、僕も大好きなんです」今度は自分から声をかけた。

雲間から夕日が差し込む。日に照らされた彼女は、少しはにかんだように微笑んでいた。